

尾張古代史の相貌がいま蘇る。

# 春日井シンポジウム 20年の歩み

春日井市・春日井市教育委員会

平成5年から20年にわたって開催し、歴史を積み重ねてきた春日井シンポジウムは、昨年、20回を節目として終了する運びとなりました。これほど長く続けられましたのも初回から企画立案に御尽力を賜りました森浩一先生を始め毎回熱心に参加していただいた皆様のおかげと感謝しております。シンポジウムに御登壇いただいた講師の先生方にも改めてお礼申し上げます。

今回、「春日井シンポジウム20年の歩み」と題し、これまで実施したシンポジウムの概要、成果をまとめました。シンポジウムの歴史を振り返るとともに、地域の歴史・文化を考える際の足掛かりとなれば幸いです。



春日井市長 伊藤 太

## 春日井シンポジウムとは・・・

春日井シンポジウムは、平成5年の市制50周年記念事業としてはじまり、平成24年まで20回にわたって開催してきました。「地域からの歴史・文化の発信」を目指し、古代史を主なテーマとして、考古学、歴史学のみならず、民俗学や人類学など幅広い分野の第一人者を招き、延べ179名の講師による研究成果の基調発表や講演、討論などを行いました。

第1回から第7回までのシンポジウムは、二子町に所在する二子山古墳やヤマトタケル伝説の残る内々神社など春日井市の歴史・文化と関わりのある古代史上の重要な事柄として、継体大王、ヤマトタケル、壬申の乱などをテーマに取り上げました。

特に第7回のシンポジウムでは、初回にテーマとした継体大王を再度取り上げ、即位の過程で尾張の勢力と結びつきを強めていくなか、「なぜ尾張地域が力を持つことができたのか」「濃尾地域が持つ力の基盤が何に起因し、どのような経緯のなかでその地位を確立していくのか」を、考古学・文献史学等の成果に立って東海の歴史像を見るという視点で講演・討論が繰り広げられました。



第1回春日井シンポジウムポスター

春日井市は全国的な知名度はないが重要な遺跡や神社、寺院址がいろいろある。知名度の高い遺跡や寺社があるとイベントを立ち上げやすいが、それに頼りすぎてしまうとほかの面白いものに目が向かないし、新しいテーマを掘り起こす努力を怠ってしまう。結局目玉となる遺跡があることで、地域史が深まらないという皮肉な結果となる。

春日井市で「なぜ20年も千人規模のシンポジウムが続き東海学が誕生したのか」、僕は将来このこと自体が「東海学の研究テーマ」になり得ると考えている。



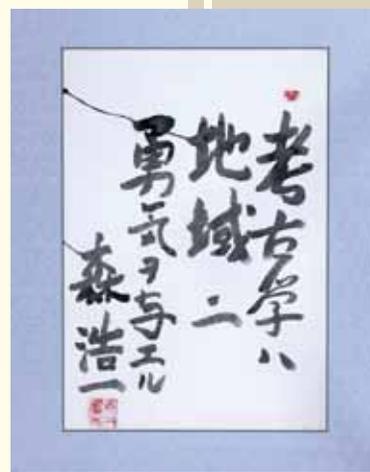
考古学者 森 浩一

第8回のシンポジウムでは、「東海学」が生まれました。「地域」を学問的に研究しようという試みで、それぞれの地域にコンパスの軸を置き、その“まとまった空間”のなかの住人を主人公として、これまでの中央集権的視点ではなく地域重視の視点で考古学・歴史学・地理学・民俗学・文化人類学など幅広い分野から「東海地域とは何か」ということを研究するものです。以後20回まで東海地域に軸足を置き、古代の技術、伝説、食文化、万葉集など様々なテーマを取り上げてきました。

東海地域は、三種の神器のうちの2つをかかえ、6世紀の尾張氏、戦国の三英傑の輩出など歴史の大きな転換点で必ず表舞台に登場しています。その原点となるもの、基盤となるものは何か。20回のシンポジウムがその答えに近づく第一歩となったと確信しています。

## 考古学は地域に勇気を与える

この言葉は、森浩一氏が1989年佐賀県鳥栖市で行われた吉野ヶ里遺跡のシンポジウムの締めくくりとして発言された言葉です。“日本のたいていの土地には遺跡があり、考古学の資料から見ると各地域にはそれぞれの文化がある。それがもととなって日本の歴史が展開したといえる。中央に対しての地方ではなく、地域の特徴、面白さを総合していくうちに、この国の歴史が垣間見えてくる。”（森浩一著『地域学のすすめ』（岩波新書）から一部引用・要約）



# シンポジウムと春日井の遺跡

春日井シンポジウムでは、春日井の遺跡に関係した古代史上の様々な事柄をテーマに取り上げてきました。シンポジウムで取り上げた市内に所在する遺跡や伝承について紹介します。

## ◆二子山古墳と下原古窯跡群

二子山古墳は春日井市二子町に所在する全長94mの前方後円墳で、6世紀の古墳としては尾張で2番目の大きさを誇ります。周辺には、白山神社古墳(前方後円墳・全長84m)、御旅所古墳(円墳・直径31m)、春日山古墳(前方後円墳・全長72m)が所在しており、味美古墳群と呼ばれます。明治の地籍図による復元では、味鉢(名古屋市北区)から味美にかけて数十基の古墳が所在していたと推定されます。



▲空から見た二子山古墳(右下)、白山神社古墳(右上)、御旅所古墳(左中)

平成4年の公園整備に伴う発掘調査では、周溝の外側に10mほどの空間をあけて1条の溝を検出し、その中から非常に多くの埴輪や須恵器が出土しました。出土した埴輪は、一般的な褐色・軟質の土師質埴輪とは異なり、灰色・硬質な須恵質埴輪と呼ばれる地域性の強い埴輪で、窯を用いて1,000度以上の高温で焼成しています。

この埴輪は、古墳から北東に約8km離れた春日井市東山町の下原古窯跡群で作られていたことが胎土分析の結果からも明らかになっており、現在5基の窯跡が現地保存されています。



▲現地保存された下原古窯跡群



第3号窯▶

窯は<sup>あながま</sup>窄窯と呼ばれる登窯の一種で、特に第3号窯は遺存状態が非常に良く、焚口から煙道、天井の一部が残っています。須恵器と埴輪の併焼窯で、6世紀初め頃に操業を開始しており、味美の勢力が須恵器生産の技術導入に大きく関与していたと考えられます。

## ◆内々神社とヤマトタケル伝説

内々神社は、「延喜式神名帳」(延長5年・927)にその名がみえる古い神社です。祭神はたけいのだねのみこと建稲種命・やまとたけるのみこと日本武尊・みやまひめのみこと宮賞姫命で、「熱田縁起」によれば、神社の創建を伝える話として次のようなものがあります。“日本武尊が東征の帰路、尾張に入りしのき篠城まで来たところ、副将軍であった建稲種命の家来であるくめのやはら久米八腹が馳せ参じ、「建稲種命が駿河の海に落ち水死された」と報告した。日本武尊はこれを聞き悲しんで「うつつかぬうつつかぬ現哉現哉」と呟いた。”その霊を祀ったのが内々神社で、神社のあるまちを内津というようになったといえます。

中世までの内々神社は、この地域一帯の篠木荘33カ村の総鎮守で、祭には村ごとに湯立神楽が奉納され、村銘のある釜が現在も残っています。また、尾張・美濃両国の農民が雨乞いの祈願を当社にかけており、この地域の住民の精神生活の中心となっていました。また、武将の崇敬も厚く、慶長2年(1597)には、豊臣秀吉が朝鮮出兵の際、戦勝を祈願して社頭の大杉7本を伐採して帆柱とし、凱旋後お礼に社殿を造営したといえます。

現在の社殿は、江戸後期に信州の立川一族によって建造されたもので、龍や獅子など多くの彫刻が施されています。社殿の裏側にある庭園は、夢窓疎石の作庭と伝えられており、京都西芳寺など疎石が作った他の庭園と同様、廻遊式林泉型という形式です。わずかな平地と急斜面を利用して作られており、神社裏山の自然の岩が巧みに取り入れられています。平地部分には丸池が水を湛え、東西から出島が突き出し、中央に中島が作られています。池の周囲の岸には種々の石組と庭樹を配し、配石の妙を見事に演出しています。社殿、庭園ともに県の文化財に指定されています。



▲内々神社社殿



社殿の彫刻▶



▲内々神社庭園

# 第1回春日井シンポジウム 継体大王と尾張の目子媛

平成5年6月5・6日

## ■第一部 尾張古代史再発見

### 〈基調報告〉

尾張の主要古墳

名古屋明德短期大学講師 松原 隆治

美濃の主要古墳 大垣市教育委員会 中井 正幸

味美二子山古墳と下原古窯

春日井市教育委員会 大下 武

尾張の埴輪と土器

(財)愛知県埋蔵文化財センター 赤塚 次郎

尾張と美濃の鏡 南山大学教授 伊藤 秋男

### 〈記念講演〉

継体大王と妃たち 作家 黒岩 重吾

## ■第二部 継体大王と尾張の目子媛

### 〈基調講演〉

河海の交通と尾張 ～中世史からの提言～

神奈川大学短期大学部教授 網野 善彦

古代の尾張と尾張氏 南山大学教授 新井喜久夫

文献からみた継体大王と春日部

京都府立大学名誉教授・京都橘女子大学教授 門脇 禎二

考古学から見た継体大王

同志社大学教授 森 浩一

越と尾張の接点・飛騨と美濃

三重大学教授 八賀 晋

## ■討論

司会／森浩一

パネラー／網野善彦・新井喜久夫・門脇禎二・八賀晋

## □誌上参加

下原窯群出土埴輪の化学特性とその供給先

奈良教育大学教授 三辻 利一

神領銅鐸について (株)三宝伸銅工業 久野雄一郎

神領出土銅鐸の復元にあたって

同志社大学講師 佐古 和枝

## □巻末資料〈資料集150～168頁〉

尾張遺跡巡り〔平成5年6月4日9～17時〕資料

〈遺跡解説〉

下原古窯跡群・神屋古窯センター・味美古墳群・密蔵院(春日井市所在)、熱田神宮・断夫山古墳・白鳥古墳(名古屋市所在)、東之宮古墳・妙感寺古墳・青塚古墳(犬山市所在)

継体王朝成立のキギを握る尾張。二子山古墳が継体大王の妃である目子媛の墓との仮説が立てられ、尾張地域が6世紀において優勢となった基盤について考古学・文献史学の立場から検証が行われました。



▲記念講演:黒岩 重吾氏



▲討論



▲基調講演:森 浩一氏

## 第2回春日井シンポジウム

平成6年11月27日

# ヤマトタケル伝説と尾張・美濃 ～見直される英雄伝説～

### ■記念講演

日本における英雄時代～ヤマトタケル伝承をめぐって～  
京都府立大学名誉教授・京都橘女子大学教授 門脇 禎二

### ■基調講演

文化人類学から見たヤマトタケル伝説  
～稲作農耕民の英雄、猪に殺される英雄、王権の山～  
東京大学名誉教授・東京女子大学教授 大林 太良  
ヤマトタケル伝承の成立過程  
京都教育大学教授 和田 萃  
東国・出雲・熊襲とヤマトタケル伝説  
同志社大学教授 森 浩一  
白鳥伝説と古墳 三重大学教授 八賀 晋

### ■討論

司会／森浩一  
パネラー／門脇禎二・大林太良・和田萃・八賀晋

### □誌上参加

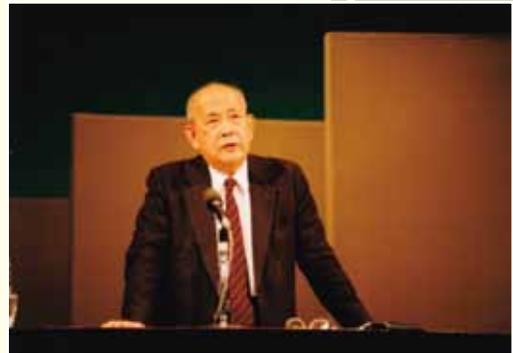
伊吹山山頂出土の石鏃  
(財)滋賀県文化財保護協会 兼康 保明  
『延喜式』にみえる日本武尊の墓  
同志社大学大学院生 北 康宏

### □巻末資料〈資料集53～119頁〉

- 資料1 『ヤマトタケル物語』  
(「映像でたどるヤマトタケル物語」原稿)
- 資料2 『ヤマトタケル物語』  
～古事記・日本書紀の比較～
- 資料3 古事記に見る『倭建命の西征・東征』の経路
- 資料4 日本書紀に見る『景行天皇巡幸』の経路
- 資料5 日本書紀に見る『日本武尊の西征・東征』の経路
- 資料6 ヤマトタケル関係神社一覧
- 資料7 建部・建部君の分布
- 資料8 (史料)尾張國熱田大神宮縁起
- 資料9 (史料)内津社本記
- 資料10 古事記〔景行天皇〕
- 資料11 日本書紀 卷第七〔大足彦忍代別天皇 景行天皇〕
- 資料12 参考文献と解説



▲記念講演:門脇 禎二氏



▲基調講演:大林 太良氏

記・紀や各地に残るヤマトタケル伝説。伝説、伝承の成立過程や考古資料から見た西征、東征の実像、英雄ヤマトタケルの原像が様々な視点から検討されました。



▲討論

# 壬申の乱と東海 ～大海人皇子から天武天皇へ～

## ■第一部

### 〈基調報告〉

古墳出土馬具からみた騎馬隊

古代の関

吉野宮の調査

南山大学教授 伊藤 秋男  
南山大学教授 新井喜久夫  
橿原考古学研究所 前園実知雄

## ■第二部

### 〈シンポジウム〉大海人皇子の時代

司会／門脇禎二（京都橘女子大学学長）

パネラー／直木孝次郎（大阪市立大学名誉教授）

森浩一（同志社大学教授）

八賀晋（三重大学教授）

新井喜久夫・前園実知雄

### 〈記念講演〉

タオイズム(中国道教)から見た壬申の乱

元・東京大学・京都大学教授 福永 光司

### 〈シンポジウム〉天武天皇の時代

司会／門脇禎二

パネラー／福永光司・直木孝次郎・森浩一・

八賀晋・伊藤秋男

## □誌上参加

尾張にみる壬申の乱前後の寺院

東海学園女子短期大学教授 岩野 見司

美濃の白鳳寺院 岐阜市歴史博物館 土山 公仁

壬申の乱をめぐる近江の遺跡

(財)滋賀県文化財保護協会 兼康 保明

壬申の乱の地名を歩く

毎日新聞特別編集委員 椎屋 紀芳

## □巻末資料〈資料集105～236頁〉

資料1 近江朝側からみた『壬申の乱』の展開(覚)  
(門脇禎二氏による覚書)

資料2 『壬申の乱』の経過に関する史料

資料3 『壬申の乱における軍事的基盤とその性格』  
に関する文献

資料4 『古代の馬』に関する文献

資料5 『美濃』および『湯沐邑』に関する文献

資料6 『不破関』に関する文献

資料7 『壬申の乱と白鳳寺院』に関する文献

資料8 『勝川廃寺(愛知県春日井市)』について

資料9 愛知・岐阜・三重・滋賀県の古代寺院分布

## ▼シンポジウム「大海人皇子の時代」



▲記念講演:福永 光司氏



▲八賀 晋氏



▲直木 孝次郎氏

古代史上最大の内乱・変革となった壬申の乱。乱とその背景を大海人皇子の天皇即位前・後の時代に立って、最新の発掘調査成果や文献史学、中国思想など様々な視点から討論が行われました。

# 第4回春日井シンポジウム 渡来人と渡来文化 ～尾張・美濃とその周辺～

平成8年 11月 16・17日

## ■第一部

### 〈基調報告〉

耳飾・唐草文様の系譜 南山大学教授 伊藤 秋男  
近江の渡来文化・その問題点  
兵庫県埋蔵文化財調査事務所 兼康 保明

### 〈記念講演〉

朝鮮半島の最新の発掘成果から  
九州大学教授 西谷 正

## ■第二部

### 〈基調発表〉

渡来人の諸相 奈良女子大学教授 佐藤 宗諄  
大陸文化と美濃・飛騨 三重大学教授 八賀 晋  
考古学上の渡来文化 同志社大学教授 森 浩一

### 〈記念講演〉

古代の日本と渡来の文化  
京都大学名誉教授・大阪女子大学学長 上田 正昭

### 〈シンポジウム〉 尾張・美濃とその周辺

司会／門脇禎二(京都橘女子大学学長)  
パネラー／伊藤秋男・兼康保明・西谷正・  
佐藤宗諄・八賀晋・森浩一・上田正昭

## □誌上参加

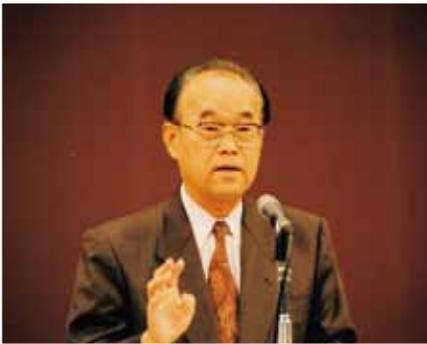
美濃・尾張の鉄 そして渡来人  
国学院大学栃木短期大学講師 細矢 藤策  
古代尾張の渡来文化  
日本福祉大学教授 福岡 猛志

## □巻末資料〈資料集93～244頁〉

資料1 古代外交関係・渡来人関係年表  
資料2 『日本書紀』にみえる外交・渡来関係記事  
資料3 『続日本紀』にみえる外交・渡来関係記事  
資料4 『新撰姓氏録』(諸蕃)本文篇  
資料5 「帰化人」と「渡来人」と「移住民」  
資料6 美濃の秦人  
資料7 『尾張名所図會』にみる楊貴妃伝説

「渡来人」の果たした役割とは何か。  
日本各地に残る渡来文化の痕跡、生活文化やことば、文字、仏教文化、さまざまな技術などについて具体的に検証されました。

▼記念講演:西谷 正氏



▲シンポジウム「尾張・美濃とその周辺」



◀記念講演:上田 正昭氏

# 古代史のなかの女性たち ～卑弥呼から光明子まで～

## ■第一部

### 〈基調報告〉

古墳における女性の被葬者～鏡と女性～

南山大学教授 伊藤 秋男

尾張古代史のなかの女性たち

日本福祉大学教授 福岡 猛志

息長伝説と考古学

(財)滋賀県文化財保護協会 兼康 保明

### 〈記念講演〉

日本社会の中の女性

神奈川大学特任教授 網野 善彦

## ■第二部

### 〈基調発表〉

考古学からみた古代の女性

同志社大学教授 森 浩一

美濃の古代戸籍からみる庶民女性

京都橘女子大学学長 門脇 禎二

女性と寺々～国分尼寺～

三重大学教授 八賀 晋

卑弥呼の原像

九州大学教授 西谷 正

### 〈要点のまとめ〉

司会／森浩一

パネラー／伊藤秋男・福岡猛志・兼康保明・

網野善彦・門脇禎二・八賀晋・西谷正

古代は女を呼んでいる ～シンポジウムを前に～

作家 中山 千夏

### 〈シンポジウム〉古代史のなかの女性たち

司会／中山千夏

パネラー／網野善彦・森浩一・門脇禎二・

八賀晋・西谷正

### □誌上参加

卑弥呼の居館と弥生～古墳の居館

新潟大学助教授 橋本 博文

尾張地方における弥生時代後期の土器編年

(財)愛知県埋蔵文化財センター 石黒 立人

東海・北陸・韓国の埴輪に見る関係

榎原考古学研究所 小栗 明彦

狗奴国東海説について

春日井市教育委員会 大下 武

### □巻末資料 〈資料集157～229頁〉

資料1 『年表(1)邪馬台国の時代』

資料2 『魏志倭人伝』原文・読み下し文・注解

資料3 『邪馬台国論争』の問題点 三角縁神獸鏡

資料4 神功皇后関係資料

資料5 『年表(2)后妃・女帝』

資料6 奈良・天神山古墳出土鏡(拓本)

▼記念講演：網野 善彦氏



▲基調報告：福岡 猛志氏



▲要点のまとめ

古代史に登場する女性たち。卑弥呼・神功皇后・齋王……。古墳や寺院などの遺跡や魏志倭人伝、古代の戸籍などの文字資料を通して、日本の歴史をつくりだしてきた女性たちの実像とその役割について検証されました。

第6回春日井シンポジウム  
**古代を歩く 旅と道** ～道路・橋・駅・関・渡し・布施屋～

平成10年11月14・15日

■第一部

〈基調報告〉

常用の馬具と儀式用の馬具 ～鑑養の問題をめぐる～  
 南山大学教授 伊藤 秋男  
 近江の交通・陸路と水路

(財)滋賀県文化財保護協会 兼康 保明

〈記念講演〉

古代の交通制度と道路  
 元・国学院大学教授 木下 良

■第二部

〈基調発表〉

「おおよけの旅」と「わたくしの旅」  
 日本福祉大学教授 福岡 猛志  
 国司の旅・防人(役民)の旅 ～大伴家持のした旅・みた旅～  
 京都橘女子大学学長 門脇 禎二  
 古代人と旅 同志社大学教授 森 浩一  
 日本の橋 京都教育大学教授 和田 萃  
 漢・唐代の橋  
 中国西北大学教授 王 維坤  
 朝鮮の橋 九州大学教授 西谷 正  
 鈴鹿関・不破関・愛発関  
 元・三重大大学教授 八賀 晋

〈討論〉

①古代の旅

司会／福岡猛志 助言／森浩一  
 パネラー／伊藤秋男・門脇禎二・西谷正

②橋と渡し

司会／兼康保明 助言／森浩一  
 パネラー／木下良・和田萃・王維坤・西谷正

③関と布施屋

司会／八賀晋 助言／森浩一  
 パネラー／木下良・門脇禎二・和田萃

□誌上参加

古代交通についての覚書  
 同志社大学講師 北 康宏  
 尾張の古道復原 春日井市教育委員会 大下 武

□巻末資料〈資料集177～200頁〉

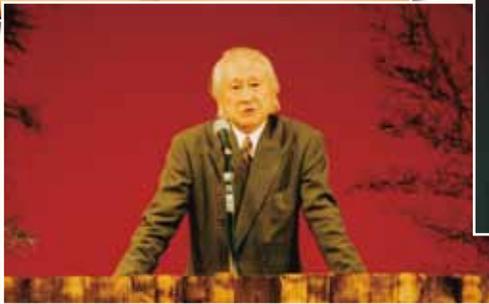
資料1 「国」「道」関係の史料年表  
 資料2 「美濃・尾張の古道」推定図  
 資料3 「令制の五畿七道」推定図



▲討論



▲基調発表：和田 萃氏



記念講演：  
 木下 良氏▶

各地の発掘調査から見えてくる古代の旅。道路・橋・駅・関など交通の実態を通して古代における人や物の交流について、「古代の旅」「橋と渡し」「関と布施屋」の3つのテーマで討論が行われました。

# 第7回春日井シンポジウム 継体シンポジウム

平成11年11月13・14日

## 特別企画〔継体サミット〕

参加市町 福井県丸岡町(現坂井市)・滋賀県高島郡高島町(現高島市)・  
大阪府枚方市・京都府宇治市・福岡県八女市・愛知県春日井市

### 〈討論〉文化財を行政に生かす

司会／宮崎淑子(女優、氏名表記は当時のもの)  
助言／森浩一(同志社大学名誉教授)

## ■第一部 継体の出自と婚姻関係をめぐって

### 〈基調報告〉

継体王朝の成立 京都教育大学教授 和田 萃

### 〈基調発表〉

振媛・三国

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 青木 豊昭

彦主人王・三尾

滋賀県高島町歴史民俗資料館 白井 忠雄

日子媛・味美二子山古墳

南山大学教授 伊藤 秋男

### 〈討論〉

司会／伊藤秋男

助言／森浩一

パネラー／和田萃・青木豊昭・白井忠雄・

兼康保明・福岡猛志(日本福祉大学教授)

討論資料「継体大王をめぐる近江の古墳」

滋賀民俗学会理事 兼康 保明

## ■第二部 淀川流域の継体大王

### 〈基調講演〉

継体・欽明王朝と考古学の諸問題

同志社大学名誉教授 森 浩一

### 〈基調発表〉

くすばと樟葉宮

(財)枚方市文化財研究調査会 西田 敏秀

継体期前後の山背地域

宇治市歴史資料館 荒川 史

継体大王の陵・棺・埴輪

高槻市埋蔵文化財調査センター 森田 克行

### 〈討論〉

司会／八賀晋(元・三重大学教授)

助言／森浩一

パネラー／西田敏秀・荒川史・森田克行・

清水眞一・赤崎敏男・門脇禎二

## ■第三部 継体大王と筑紫君磐井

### 〈基調講演〉

継体・欽明紀にあらわれた朝鮮半島の地名と考古遺跡

九州大学教授 西谷 正

### 〈基調発表〉

玉穂宮・手白香媛の墓

桜井市教育委員会 清水 眞一

磐井の乱と岩戸山古墳

八女市教育委員会 赤崎 敏男

### 〈討論〉

司会／福岡猛志(日本福祉大学教授)

助言／森浩一

パネラー／森田克行・西谷正・清水眞一・

赤崎敏男・大竹弘之

討論資料「潘南面 新村里九号墳の再調査」

枚方市教育委員会 大竹 弘之

### 〈まとめの対談〉

司会／宮崎淑子(女優、氏名表記は当時のもの)

対談／門脇禎二(京都橘女子大学学長)・森浩一

### □誌上参加

今城塚古墳の築造規格

春日井市教育委員会 大下 武

### □巻末資料(資料集181~250頁)

資料1 『日本書紀』卷第十七

[男大迹天皇 継体天皇]

資料2 『古事記』仁賢天皇・武烈天皇・継体天皇・  
安閑天皇・宣化天皇・欽明天皇

資料3 『新日本書紀』卷第十三

資料4 研究史 継体大王

資料5 継体関係用語解説

資料6 継体関係基礎史料



継体大王は、どのようにしてどのような王朝をつくり上げていったのか。東海・北陸・近畿・九州・朝鮮半島をめぐってその実態の解明にむけ、講演・討論が行われました。また、継体にかかわる市町の首長による「継体サミット」が行われ、歴史をテーマに文化交流が図られました。



▲まどめの対談



▲基調講演：西谷 正氏



▲継体サミット

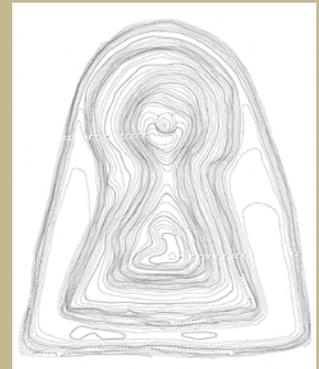
## 継体大王と二子山古墳

二子山古墳と継体天皇陵と考えられている今城塚古墳（大阪府高槻市）は、墳形の規格について共通性が指摘されています。今城塚古墳が全長190mであるのに対し、二子山古墳は全長94m、ほぼ相似形で5割ほどの大きさとなります。尾張連草香の墓と推定される断夫山古墳（名古屋市熱田区）も今城塚古墳の8割の相似形であるとされており、この3古墳の密接な関わりが古墳の築造規格からうかがうことができます。

各古墳から出土する埴輪についても、今城塚古墳が新池遺跡、断夫山古墳が東山古窯（推定）、二子山古墳が下原古窯から供給されたことがわかっており、近接して窯業遺跡が控えるという供給体制にも共通点が見られます。また、埴輪祭祀のあり方についてもその共通性が指摘できます。今城塚古墳では、内堤上に設けられた祭祀区画に人物、動物、器財など135点に及ぶ埴輪が65mにわたって配置されていました。二子山古墳でも周溝の外側の溝状遺構から60点を超える形象埴輪が出土しており、原位置をとどめていないため、その配列は不明ですが、祭祀空間、マツリのあり方など一定の影響下にあったことが示唆されます。

各古墳の発掘調査で明らかとなった古墳・埴輪祭祀の類似性は、二子山古墳の被葬者を考えるうえで重要な成果といえます。

▼二子山古墳測量図



▲二子山古墳出土円筒埴輪・馬形埴輪

# 「東海学」の創造をめざして ~考古学と歴史学の諸問題~

## ■第一部

### 〈基調発表〉

伊勢湾周辺の鏡 ~伝承の鏡を洗う~

南山大学教授 伊藤 秋男

### 〈各地域の解説〉

遠江の地域的特性 ~古代遺跡がもつ親水性について~

同志社大学助教授 辰巳 和弘

三河の地域的特質 岡崎市社会部 荒井 信貴

伊勢の地域的特質

~近畿から東国へ至る陸路と海路の地域拠点~

三重県埋蔵文化財センター 穂積 裕昌

伊那谷の地域的特性

飯田市教育委員会 小林 正春

近江の前方後方墳 滋賀民俗学会理事 兼康 保明

### 〈基調講演〉

“東海学”の創造をめざして

同志社大学名誉教授 森 浩一

## ■第二部

### 〈基調発表〉

伊勢湾と三河湾の海人

日本福祉大学教授 福岡 猛志

伊勢神宮と熱田神宮

京都教育大学教授 和田 萃

東海に見られる朝鮮系文化

九州大学大学院教授 西谷 正

### 〈基調講演〉

宝塚1号墳船形埴輪と伊勢湾世界

三重大学名誉教授 八賀 晋

### 〈討論〉

司会/福岡猛志

助言/森浩一

パネラー/伊藤秋男・和田萃・西谷正・八賀晋

### 〈まとめの対談〉

司会/竹下景子(女優)

対談/森浩一・福岡猛志

### □誌上参加

東海のなかの尾張と美濃

~とくに古東海道と古東山道について~

春日井市教育委員会 大下 武

### □巻末資料(資料集149~249頁)

資料1 東海の子墳分布(全体・地域)

資料2 東海の子墳(尾張の子墳群・美濃の子墳群・東三河の子墳の個別解説)

資料3 尾張の文献(江戸時代を中心)

「東海」に軸足を置き歴史を再構築する試み「東海学」。地域重視の視点で各地域の特性についての発表や基調講演が行われました。



◀基調発表:  
伊藤 秋男氏



▲基調講演:森 浩一氏



▲討論

第9回春日井シンポジウム  
「東海学」を深める ～弥生から伊勢平氏まで～

平成13年11月10・11日

■第一部 東海系(東海諸地域)土器の拡散

〈基調報告〉

東海系土器のなかの伊勢の土器  
三重県埋蔵文化財センター 穂積 裕昌

尾張に独自性はあるのか  
～濃尾地方における土器地域色の推移とその背景～

(財)愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター  
石黒 立人

弥生時代後期における三河・遠江系土器の拡散  
浜松市博物館 鈴木 敏則

東海系土器の末裔たち  
群馬県箕郷町教育委員会 田口 一郎

ヤマトの東海系土器 ～伴堂東遺跡を中心として～  
榎原考古学研究所 坂 靖

〈討論〉

司会／穂積裕昌  
助言／八賀晋 (三重大学名誉教授)  
パネラー／石黒立人・鈴木敏則・田口一郎・坂靖

■第二部 中世陶器(渥美・常滑)の拡散

〈基調報告〉

中世陶器にみる東海文化の拡散  
同志社大学歴史資料館 鋤柄 俊夫

東海の中世窯 ～生産と流通の諸相～  
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 藤澤 良祐

中世東国における「東海」  
福島県教育庁 飯村 均

北陸の扉を開いたか東海の焼き物  
国立福井工業高等専門学校教授 荻野 繁春

〈討論〉

司会／鋤柄俊夫  
助言／森浩一  
パネラー／藤澤良祐・飯村均・荻野繁春

■第三部

〈基調発表〉

前方後方墳の拡散 滋賀民俗学会理事 兼康 保明  
尾張氏をめぐる伝承と史実

京都教育大学教授 和田 萃  
軍記文学にあらわれた伊勢平氏と木曾義仲

同志社大学教授 加美 宏  
御家人千竈氏の所領

名古屋大学教授 小田 雄三

〈基調講演〉

東海学の整理と今後の展望  
同志社大学名誉教授 森 浩一

■第四部

〈討論①〉土器の拡散と前方後方墳

司会／八賀晋  
助言／森浩一  
パネラー／鋤柄俊夫・穂積裕昌・兼康保明

〈討論②〉文献からみた東海の拡散現象

司会／福岡猛志 (日本福祉大学教授)  
助言／森浩一  
パネラー／和田萃・加美宏・小田雄三

〈まとめの鼎談〉

司会／竹下景子 (女優)  
鼎談／森浩一・和田萃・福岡猛志

□誌上参加

東海系土器の受容とその地域性  
～古墳時代初頭前後の北陸西部～

福井県朝日町教育委員会 堀 大介  
纏向遺跡の東海系土器について

奈良県桜井市教育委員会 清水 眞一  
土器の交流 ～近畿北部と東海～

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 高野 陽子  
伊勢平氏と水運・物流の接点を探る

斎宮歴史博物館 伊藤 裕偉  
矢作川水系の古墳

春日井市教育委員会 大下 武

□巻末資料〈資料集巻末1～137頁〉

- 東海の古墳解説[2]
- 一 三河の地形
  - 二 水系による区分
  - 三 矢作川水系
  - 四 上流から下流まで各市町村ごとの古墳紹介
    - 1 小原村・藤岡町の古墳
    - 2 豊田市の地形と古墳の分布
    - 3 岡崎市の地形と古墳の分布
    - 4 安城市の地形と古墳の分布
    - 5 知立市の地形と丸山古墳
    - 6 西尾市の地形と古墳の分布
    - 7 額田郡幸田町の地形と古墳の分布
    - 8 幡豆郡吉良町の地形と古墳の分布

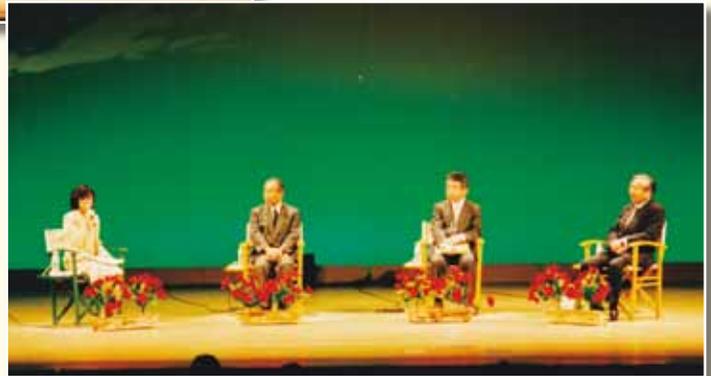
▼討論:「東海系土器の拡散」



「東海学」第2弾。弥生時代から中世を中心に、土器や人・技術が動く東海の持つ「拡散性」について、発掘調査など第一線で活躍する担当者や考古・文献研究の第一人者を講師に招き、一歩踏み込んだ東海の歴史が検証されました。



▲基調報告:鋤柄 俊夫氏



▲まとめの鼎談

## 地域学を考える ～地域学が歴史を変える!?～

“日本の歴史は、地域の重要さを軽視しては本当の姿を見ることができない。日本列島の形成を述べた記・紀の国生み神話や倭の各小国を詳細に記した魏志倭人伝からも、読み方によっては地域学の必要性を汲み取ることができる。各地の地域史の成果を総合して研究することで本当の日本歴史が語られるだろう。” (森浩一著『地域学のすすめ』(岩波新書)から要約)

東海学、関東学、東北学、京都学、飛鳥学、日本海地域学……。様々な地域でその地域に軸足を置いた研究が盛んに行われています。長く都がおかれた奈良や京都も見方によっては、中央ではなく一地域と捉えることができます。また、地域の歴史的特徴を捉えるためには、いろいろな地域との比較も重要となります。

それぞれの地域の歴史・文化の原点となるものは何か。自らの足元を多角的に見たり考えたり、他地域と比較しながら探り深めていくことで、これまでの中央集権的な視点では見えなかった地域の再発見、あるいは新たな日本の歴史像を見出すことが出来るかもしれません。

# 日本文化を考える ～東海学を深める視点から～

## ■第一部 日本文化における山と川の役割

### 〈基調報告〉

山と信仰 滋賀民俗学会理事 兼康 保明  
道と祭祀 ～古東山道の場合～

南山大学教授 伊藤 秋男  
矢作川の水運 豊田市役所 杉浦 裕幸

岡崎市美術館 荒井 信貴  
吉良町教育委員会 三田 敦司

筑後川・菊池川の流域史  
九州大学名誉教授 西谷 正  
八女市教育委員会 赤崎 敏男

### 〈まとめ〉

司会／八賀晋（三重大学名誉教授）  
パネラー／兼康保明・伊藤秋男・杉浦裕幸・  
西谷正・赤崎敏男

## ■第二部 神仙信仰と東海

### 〈基調報告〉

吉野と熱田の神仙世界 ～南山・三山・蓬萊～  
京都教育大学教授 和田 萃

熱田神宮の「蓬萊」鏡  
同志社大学講師 中村 潤子

前方後円墳は蓬萊山がモデルか  
京都学園大学教授 岡本 健一

三河の「蓬萊山」(鳳来寺山)について  
同志社大学歴史資料館 鋤柄 俊夫

### 〈討論〉

司会／福岡猛志（日本福祉大学教授） 助言／森浩一  
パネラー／和田萃・中村潤子・岡本健一・鋤柄俊夫

## ■第三部

### 〈記念講演〉

中国の蓬萊信仰 ～神仙思想と銅鏡の銘文～  
京都産業大学教授 森 博達

### 〈まとめの鼎談〉

司会／宮崎美子（女優）  
鼎談／森浩一（同志社大学名誉教授）・和田萃・森博達

## ■第四部 地域からの発言

### 〈記念講演〉

民族文化の形成と東海地域  
～私見、地域学と行政との接点も含めて～

京都府立大学名誉教授 門脇 禎二

### 〔東海6市サミット〕日本文化の創造をめざす行政

司会／宮崎美子 助言／森浩一  
参加市／静岡県磐田市・三重県松阪市・  
岐阜県大垣市・愛知県豊川市・  
愛知県豊田市・愛知県春日井市

### □誌上参加

阪内川・櫛田川流域の主要な遺跡  
～縄文街道から古代王権の拠点へ～

松阪市教育委員会 福田 哲也

揖斐川水系と大垣周辺の遺跡  
大垣市教育委員会 中井 正幸

土製模造品祭祀の源流  
～天竜川と太田川流域の遺跡～

磐田市教育委員会 竹内 直文

豊川流域の主要な遺跡  
豊川市教育委員会 林 弘之

低山から高山へ～古代白山信仰の成立～  
朝日町教育委員会 堀 大介

豊川水系の古墳と積石塚  
春日井市教育委員会 大下 武

### □巻末資料〈資料集巻末1～132頁〉

東海の古墳解説[3]東三河編 豊川水系の古墳

1 三水系の源流地域～奥三河～

①足助町 ②稲武町 ③作手村

④設楽町・東栄町・鳳来町

2 豊川水系と古墳分布の概観

①新城市 ②一宮町 ③豊川市

④御津町・小坂井町

日本特有の文化を生み出した山と川。そうした自然を背景に生まれた信仰。山・川の役割と信仰の視点から日本文化の中の東海文化の位置付けについて検証されました。また、文化行政に力を入れる6市の首長を招き、東海6市サミットが行われました。



▲東海6市サミット